
日本図書館文化史研究会

ニューズレター

第 110 号 2009 年 10 月 24 日

日本図書館文化史研究会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jalih/index.html>

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1

明治大学司書・司書教諭課程

郵便振替口座 00170-5-164973

■■ 目 次 ■■

日本図書館文化史研究会 2009 年度研究集会好評裏に終了	2
石井敦先生追悼	
石井敦先生へ(小川徹)	3
石井敦先生追悼事業について	4
日本図書館文化史研究会 2009 年度第 2 回研究例会のご案内	5
2009 年度研究集会『予稿集』頒布のお知らせ 『近代日本公共図書館年表』割引販売のお知らせ 『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領	8
『図書館文化史研究』第 27 号原稿募集のお知らせ 『図書館文化史研究』第 26 号が発行されました	
2009 年度研究集会シンポジウム報告要旨	11
2009 年度研究集会個人発表要旨	12
図書館文化史研究 文献紹介 山河遙か 上州・先人の軌跡 第 9 部 佐野友三郎(『上毛新聞』2009 年 3 月 16 日～4 月 17 日)(奥泉和久)	14
運営委員会通信	15
事務局だより	16
会費納入のお願い 住所変更等のご連絡をお願いします 会員動向	

日本図書館文化史研究会

2009 年度研究集会・総会、好評裏に終了

日本図書館文化史研究会 2009 年度研究集会・総会は、9 月 13・14 日の両日、皇學館大学・伊勢キャンパスを会場に開催されました。参加者は 43 名でした。今回の研究集会・会員総会は、東京などの大都市を離れての開催となりました。新型インフルエンザの流行なども加わり、どの程度参加者を得られるかが懸念されましたが、昨年とほぼ同じ参加者数となりました。

今年度は研究集会に先立って、9 月 12 日に「近世松阪の出版・蒐書文化と伊勢商人の文庫見学」と題してオプションツアーを実施しました。このツアーには、26 名が参加しました。継松寺所蔵の「岡寺版集帖」の板木、竹川家射和文庫の蔵書など、貴重な資料を間近で見る機会を得てたいへん好評でした。なお 13 日午前中には、神宮徴古館の見学が行われ、こちらには 16 名が参加しました。

13 日の午後、まず会員総会が実施されました。小川徹氏を議長に選出し、2008 年度の活動・決算が報告され、続けて 2009 年度予算案が提案され、それぞれ承認されました。また『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領の一部改正など、機関誌の編集体制の見直しが提案され、承認されました。改正版『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領は 8～10 ページをご覧ください。次に創立 25 周年記念事業の剰余金の使途について、図書館文化史研究の奨励・顕彰の制度を設けることが提起されましたが、シンポジウム開始の時刻が迫ったため、2 日目の個人発表終了後に継続して審議することになりました。

会員総会中断後、「これからの図書館史教育と図書館史研究」と題してシンポジウムが開催されました。阪田蓉子代表の開会挨拶に続き、柴田正美氏、志保田務氏から報告をいただき、その後全体で討論が行われました。柴田・志保田両氏の報告要旨は、11 ページをご覧ください。またシンポの様子は、『図書館文化史研究』27 号に掲載予定です。なお、司会進行は小黒が担当しました。

シンポジウム終了後、伊勢内宮前おかげ横丁内の「すし久」に移動して、懇親会が開催されました。阪田代表の挨拶の後、小川名誉会員の乾杯で開宴し、清流五十鈴川を見下ろしながら歓談の一時を過ごしました。会場は明治初期に建造された風情あるもので、伊勢地方の郷土料理とともにたいへん好評でした。

14 日は、個人発表 4 件が行われました。個人発表の司会は、奥泉和久氏と三浦太郎氏が担当しました。各発表の要旨は、12～14 ページをご覧ください。

個人発表終了後、会員総会を再開し、前日に引き続き図書館文化史研究の奨励・顕彰の制度設置について協議しました。その結果、この件については制度設置の方向で今後運営委員会で、さらに検討を進めることになりました。会員総会終了後、運営委員会が行われました。運営委員会の議事要旨は 15 ページに掲載しました。

終わりにりましたが、このたびの研究集会・総会の開催に際しお世話になりました高倉一紀氏（皇學館大学）、中川豊氏（市立津図書館）に心よりお礼申し上げます。（小黒記）

石井敦先生追悼

石井敦先生へ

小川 徹

先生は何よりも戦後における近代日本図書館史研究の草分けであり、第一人者です。1950年代初め、研究に不可欠な、明確な方法を図書館職員養成所時代に考え抜き、御自分のものとして確立されました。それは「図書館近代化過程における二つの型」（『図書館職員養成所卒業論文 1951年度』, 1952）にみられます。

そして後に『日本近代公共図書館史の研究』（JLA, 1972）に収録された「日本図書館史に於ける山口図書館の意義」（上下）（『図書館界』5-1, 2, 1953）はそれを実証する論考に他なりません。これは当時画期的な労作でしたし、今なおこれを乗り越える論考は出ていないのではないのでしょうか。

先生はその後、「1910年の転機」、「黎明期の日本公共図書館運動」、「我が国巡回文庫頽廢化の歴史」などを続けて世に問い、近代日本の図書館が生みの苦しみの中で誕生していく姿、そしてそれが旧帝国憲法のもと、厳しい思想言論の統制・弾圧の中でゆがめられていく姿を描き出しておられます。筆は労働運動や農民運動のなかで生み出されながら、すぐに姿を消してしまう図書館にも及んでいます。それらは単なる「図書館史」の叙述ではなく、御自身、JLAに身をおき、その後神奈川県立で、戦後の貧弱な図書館をどうすればいいのかを考えられ、「中小レポート」作成作業に関わり、図書館問題研究会の立ち上げに係わるなどの活動に身をおきながら深められた思索の集積です。

さて、先生とのわたしの交流は日本近代図書館史研究という枠組みに限られますが、さまざまのことが思い起こされます。多くの人々を魅了して止まなかった『図書館の発見』（NHKブックス, 1973）の先生が執筆された部分について私見を「書評」と称して『大図研論文集 4』（1974）に投じ、そのコピーをお送りして、丁寧なご返書をいただいたところから、先生へのお近づきが始まりました。図書館史研究会に誘ってくださり、先生のお仕事のお手伝いをするようにもなりました。『近代日本図書館の歩み』の編集にかかわったこともそのひとつです。それらを通して、先生から多くのことを学び、近代日本の図書館史への関心を深めて今日にいたりました。

先生は上記『日本近代公共図書館史の研究』のあとがきで、竹林熊彦氏の業績に触れつつ、その史料探求・研究があったからこそ、自分の研究がある、と言われています。

竹林熊彦氏が切り開き、先生が鋭いメスを入れられた近代日本図書館史という領域、まだまだ未開拓な部分があります。後学のわたしたちはおふたりに学びながら、問題をより深く極めて行きたいと考えております。

どうぞ安らかにお休みください

石井敦先生追悼

石井敦先生追悼事業について

『ニューズレター』109号で速報のとおり、石井敦先生がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

石井先生は、1982年の本研究会（当時は図書館史研究会）の創立に際し中心的な役割を果たされました。また、『日本近代公共図書館史の研究』（日本図書館協会 1972）などのすぐれた研究業績を遺されました。

石井先生のご逝去を悼み、本研究会では次のような追悼事業を行うことになりました。

- ① 会報『ニューズレター』110号に追悼文を掲載する。
- ② 機関誌『図書館文化史研究』27号を、石井先生追悼号として刊行する。
- ③ 2009年度第3回研究例会を、「石井敦先生を偲ぶ会」（仮称）として開催する。

このうち①については、前ページに小川徹前代表による追悼文を掲載しました。②については、藤野幸雄氏による追悼文などを掲載して、2010年9月に刊行予定です。③については、現在次のような方向で企画検討中です。

「石井敦先生を偲ぶ会（仮称）」の概要
（日本図書館文化史研究会 2009年度第3回研究例会）

- 開催日時： 2010年3月中の土曜日の午後
- 開催場所： 日本図書館協会会館2階研修室
東京都中央区新川 1-11-14
東京メトロ茅場町駅（東西線、日比谷線）下車徒歩5分
(<http://www.jla.or.jp/kaikan.htm>)
- 開催方法： 日本図書館協会との共同開催とし、内容等が確定した段階で、他団体などへ参加を呼びかける。
- 報告者： 交渉中
- 参加費： 参加費 2,000円程度
※ 参加費にて「偲ぶ会」の模様を記録した冊子を作成し、石井先生のご霊前に供するとともに、後日参加者に頒布する。

日程、内容等が決定次第、研究会のウェブサイトに掲載します。また、『ニューズレター』次号（111号、2010年2月頃発行予定）に詳細な案内を掲載します。

日本図書館文化史研究会
2009年度第2回研究例会のご案内

2009年度第2回の研究例会を、下記のように開催します。是非ともご参加ください。

例会時に、奥泉和久氏編著の『近代日本公共図書館年表』の割引販売を行います（割引販売のご案内は7ページをご覧ください）。また、研究例会・運営委員会終了後、奥泉氏の『年表』刊行を記念する集いを、研究例会会場近辺で開催予定です（会費は6,000円程度の見込みです）。この「集い」への参加をご希望の方も、あわせてお申し込みください。

記

- 日 時 11月28日(土) 13時30分～15時40分
- 場 所 明治大学 リバティタワー6階 1062教室
http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/
※ リバティタワーの位置、交通等は7ページ掲載の地図をご参照ください。
- 参加費 無料
- 申込方法 参加ご希望の方は、次の事項を明記して下記申込先まで、はがき、ファックス、または電子メールにてお申し込みください。
※ 氏名（ふりがな）、所属、『年表』の会場での購入希望の有無、「集い」参加希望の有無
- 申込先 〒321-3295 宇都宮市竹下町908
作新学院大学 司書・司書教諭課程 小黒 浩司
電子メール：oguro@sakushin-u.ac.jp
ファックス：028-670-3671
- 申込締切 11月23日(必着) でお申し込みをお願いします。

【発表1】

- 発表者
奥泉 和久（横浜女子短期大学図書館）
- 発表題名
図書館年表論・序説
- 発表要旨
図書館史に関する著作には、「図書館年表」が付されることは少なくなく、

〇〇周年記念誌のなど場合にも、必ずといってよいほど「年表」が記される。館種を問わず、図書館の規模の大小にも関わりなく、「図書館年表」の果たす役割は、補助的とはいえ、重視されている。

ところが、「図書館年表」を正面から論じた論文には、天野敬太郎氏の一編があるのみであり、「年表」は重視される一方で、研究対象としてまともに論じられることはなかった。ここでは、石井敦氏の「図書館年表に関するメモ」（仮称、奥泉の記録による）を紹介しながら、報告者の近著『近代日本公共図書館年表』（日本図書館協会、2009）をもとに、「図書館史年表」作成の意義を検討する。

【発表 2】

○ 発表者

小黒 浩司（作新学院大学）

○ 発表題名

明治大学図書館蔵『検閲週報』について

○ 発表要旨

明治大学図書館には『検閲週報』合冊製本1冊を所蔵している。本発表では最初に、この『検閲週報』の他図書館等での所蔵状況についての調査結果を報告し、『検閲週報』の発刊と頒布の経緯を考察する。

次に明大本『検閲週報』の合綴文書類を紹介する。まず中間部には、1944年6月以降に内務省が作成したとみられる、図書館での閲覧禁止資料に関する取り扱い要領等を示した文書が綴じられている。これは同年5月の内務・文部両省による「出版物閲覧指導強化」に関連して作成されたものと推定される。

また巻末には、所轄署特高係の名刺や発禁や削除となった資料が綴じられている。これも第二次世界大戦末期における大学図書館統制の実態を伝えるものであるので、周辺資料などを含めて、少し詳しく紹介したい。

2009 年度研究集会『予稿集』頒布のお知らせ

2009 年度研究集会・総会の『予稿集』を、実費（680 円）で頒布します（A4 版・本文 59 ページ）

郵送ご希望の方は、送料（80 円）を加えた、合計 760 円をそえて（郵券可）、送り先の郵便番号・住所・お名前を明記して、事務局までお申し込みください。

『近代日本公共図書館年表』 割引販売のお知らせ

奥泉和久氏編著の『近代日本公共図書館年表 1867～2005』（日本図書館協会刊、税込み 8,400 円、9 月 30 日発売）を、研究会会員限定で次のように割引販売します。

1. 第 2 回研究例会会場での販売

第 2 回例会参加の方に、特別割引価格 6,300 円（税込み）で販売します。例会参加申し込みの際に、会場での『年表』購入を希望する旨をお書き添えください。事前にお申し込みの方に限らせていただきます。

2. 郵送での販売

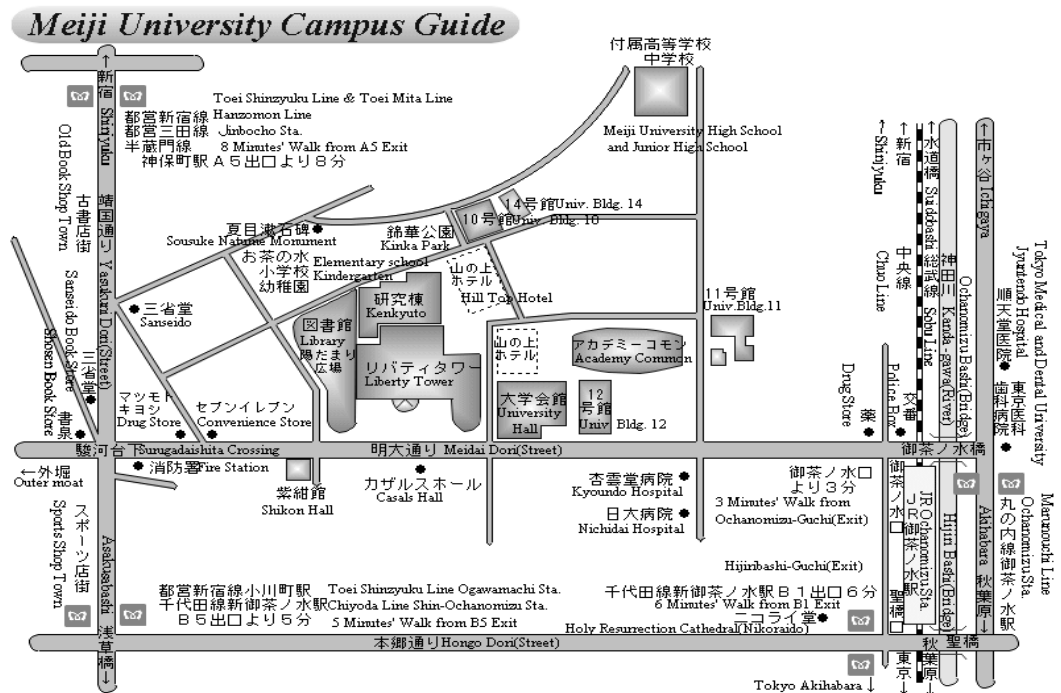
研究会会員の方限定で日本図書館協会が割引販売をいたします。

- 価 格：7,000 円（税・送料込み）
- 申込方法：下記へ、ファックスかメールにてお名前、部数、送り先、電話番号をお知らせください。振替用紙をつけてお送りいたします。
- 申 込 先：日本図書館協会 出版販売係

Fax 03-3523-0842 E-mail hanbai@jla.or.jp

※ いずれも、件名に「近代日本図書館年表 割引購入希望」と明記し、文面に日本図書館文化史研究会会員であることをお書き添えください。

会場案内



『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領

応募資格等

1. 日本図書館文化史研究会会員は投稿することができる。
2. 応募原稿は未発表のものに限る。ただし口頭で発表し、これをまとめたものは除く。
3. 掲載原稿の著作権は、本研究会に帰属する。ただし著者は、本会に連絡して、転載することができる。

応募原稿等

4. 原稿は完全原稿とする。ワープロ等を使用する場合、A4用紙（縦位置）、1行40字×40行・横書きの書式に設定する。手書きの場合は400字詰（20字×20行）原稿用紙を用いる。
5. 枚数制限は特に設けないが、長文の場合2回以上の分載とすることがある。
6. 図版は占有面積1ページ分を400字詰原稿用紙3枚の割合で換算し、そのまま版下として使用できるよう鮮明なものを提出する。
7. 原稿はMS-DOS標準テキストによるワープロ原稿が望ましい。
8. 標題（外国語併記）、著者名（ローマ字併記）、著者の所属機関名、原稿の区分、および連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を記入した別紙を添付する。
9. 原稿本文の冒頭に原稿の区分、標題、250字程度の和文抄録を記載する。

原稿の提出

10. 原稿はコピーを含め2部を提出する。なお、投稿原稿は返却しない。
11. 原稿は書留により別記編集委員会に郵送する。ワープロ原稿の場合、掲載が決定次第、電子データを添付ファイルで提出する。
12. 原稿の締切は、毎年12月末日（必着）とする。

編集委員会

13. 原稿の採否は編集委員会が決定する。
14. 論文と研究ノートは、別に定める査読内規に基づく審査を経て、編集委員会が採否を決定する。
15. 書評の掲載については、別に定める書評掲載にあたってのガイドラインによる。
16. 編集委員会は原稿の内容・表現等について、著者に修正・書き直しを求めることがある。また、編集委員会で用字・用語等について、修正・統一をすることがある。

校正・抜刷

17. 著者校正は再校までとする。その際、字句の修正以外は原則として認めない。

18. 著者には抜刷 20 部を進呈する。

体裁・表記

19. 原稿の執筆は以下の要領による。

- ① 本文の見出し区分は、原則としてポイントシステムを使用し、次のように表記する。
 1. _____
 - 1.1. _____
 - 1.1.1. _____
- ② 句読点は「,」「。」を用い、各 1 字分をとる。その他の記号類も各 1 字分をとるが、点線 (……)・ダッシュ (—) は各 2 字分をとる。
- ③ 数字は引用文、および漢語の一部となっている場合を除き半角アラビア数字を用いる。
- ④ 外国語は慣用的呼称をカタカナで表記し、必要に応じて原綴を () に記す。手書き原稿の欧文文字の大文字は、1 マス 1 字、小文字は 1 マス 2 字をあてる。
- ⑤ 西暦年以外の紀年を使用するときは、必要に応じて西暦年を () に入れて併記する。
- ⑥ 本文中の引用文献のタイトルは、欧語の場合は斜体で、手書き原稿はアンダーラインで示し、それ以外は『 』に入れる。
- ⑦ 本文中の論文等のタイトルは、欧文の場合は“ ”に入れ、それ以外は「 」に入れる。
- ⑧ 本文中の引用は、「 」、または“ ”に入れる。長文の場合は行を改め、本文より 2 字下げて記す。
- ⑨ 注は 1)、2) のように通し番号を付け、全文の末尾にまとめる。その際文献の記載については、原則として以下のように記載する。

[雑誌論文からの引用]

1) 渡辺重夫「国民の権利としての図書館利用」『図書館学会年報』Vol.30, No.2, 1984.6, p. 55-56.

2) Harris, Michael H.“The dialectic of defeat : antimonies in research in library and information science,” *Library Trends*. Vol.34, No.3, 1986, p.515-531.

[図書からの引用]

3) 永末十四雄『日本公共図書館の形成』日本図書館協会, 1984, p.352-353.

4) Newhouse, Joseph P. and Arthur J. Alexander. *An Economic Analysis of Public Library Services*. Lexington, D.C. Heath Co., 1972, p.120-121.

[インターネット上の情報]

5) 石村恵子「電子図書館と著作権」『つくばね』[オンライン] Vol. 23, No. 4, 1998.4 [引用日: 1998-09-07] <URL:<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tsukubane/2304/ishinura.html>>

6) International Council on Archives. *ISAD(G) : General International*

Standard Archival Description [online]. Ottawa, ICA, 1994[引用日: 1998-09-07]<URL:http://www.archives.ca/ica/isad.html>

原稿の送付先

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1 明治大学司書・司書教諭課程
日本図書館文化史研究会

『図書館文化史研究』第 27 号原稿募集のお知らせ

『図書館文化史研究』第 27 号の原稿を募集中です。
原稿の締め切りは、2009 年 12 月末日です。ふるってご投稿ください。
なお、この件に関するお問い合わせ、ならびに原稿の送付先は事務局までお願いいたします。

『図書館文化史研究』第 26 号が発行されました

『図書館文化史研究』第 26 号が刊行されました（本文 123 ページ、本体価格 2,380 円）。目次は以下の通りです。

会員の皆さまには、9 月初旬に発送済みです。未着の方は、至急事務局までご連絡ください。

[特別講演]

「21 世紀の図書館協力」と「本の道」—IFLA ソウル大会に因んで—

本間一夫と日本点字図書館
竹内 哲
阪田 蓉子

[研究ノート]

日本陸軍の図書接收活動—「陸軍省大日記」に見る—
榎谷 純一

[書評]

『公共図書館サービス・運動の歴史』
石山 洋

[書評反論]

石山洋氏の拙著に対する書評に答える
岩猿 敏生

[人名索引]

『図書館人物伝：図書館を育てた 20 人の功績と生涯』人名索引
松崎 博子

2009 年度研究集会シンポジウム報告要旨

報告①

柴田 正美 (帝塚山大学)

○ 報告題名

省令科目をふりかえる一戦後における司書・司書教諭養成体制を整理する一

○ 報告要旨

2009年4月30日施行の省令により「大学主体の養成カリキュラム」が始まることになったが、1950年9月6日の最初の省令から今回の省令に至るまでに9回の改正が実施され、うち5回が養成に関わるものであった。

それらの改正が、司書養成体制にどのような影響を与え、また与えられたかを大学等における開講数を把握することで考察した。

開講数を把握するための資料は数多くあるが、それらのデータの信頼性は低く、正確な把握のためには引き続き検証を加える必要があるだろう。ともあれ、それらの資料の語るところは、省令改正等がきっかけとなって司書・司書教諭養成体制は変遷を経たことは明白であろう。

今回の「大学主体の養成カリキュラム」は、大学基準協会・日本図書館協会図書館学教育部会等が求めてきたことに一步近づいたことは明らかであるが、その内実化について「教育・研究の自由」と関連させながら、各大学および図書館情報学教育担当者の一層の努力が必要とされる。

報告②

志保田 務 (桃山学院大学)

○ 報告題名

日本の司書養成省令科目における図書館史関係事項の取扱いについて：その変遷と現代的な位置について

○ 報告要旨

図書館史関係科目の内容と変更の経緯を、①全体史、②本報告は今般の省令改正、二つのスパンにおいて追った。①では、①戦後の諸種の図書館法案(1948-49年)の一つ加藤・雨宮案に図書館関係科目を把握。図書館施行規則(1950年：全15単位上)で選択甲群(5科目5単位)中の1単位に「図書館史」、選択乙群(5科目5単位)中に、「図書及び印刷史」1単位がある。1968年の改正で、選択「図書及び図書館史」(1単位)となる。初期に比して0.5単位程度減少。1996年改訂の初期一時図書館史が科目案から欠落の事実がある。これらの点の確認が必要である。②2009年の「大学における図書館に関する科目」においても、最初の案(2008年)に「図書・図書館史」がなく、パブコメ、抗議等により選択科目(1単位)となった。教育関係でも機を逸せず要求行動をする必要性をここに見た。

2009 年度研究集会個人発表要旨

発表①

膽吹 覚 (福井大学)

○ 発表題名

藩校文庫の管理運営に関する研究

○ 発表要旨

文部省編『日本教育史資料』には 245 校の藩校の資料が収録されている。この中で文庫を担当するポストを設置していた藩校は 33 校で、それを設置していなかった藩校は 18 校、不明が 194 校であった。ポストがあった 33 校中の 18 校はその職掌の記載がなく、残る 15 校のうち、文庫の管理運営と教育職を兼務していた藩校が 9 校、文庫の管理運営と事務職を兼職していた藩校が 2 校、教員と事務員が共同 (分担) して兼職していた藩校が 1 校、教員の監督下で、学生が蔵書の出納に携わった藩校が 2 校、文庫の管理運営だけを担当していた藩校が 1 校であった。一方、ポストを設けていなかった藩校を見ると、事務員の職務の 1 つに文庫の管理運営が含まれていた藩校が 10 校、教員の職務の 1 つに文庫の管理運営が含まれていた藩校が 5 校、教員と事務員が共同 (分担) して担当していた藩校が 2 校、教員の監督下で、学生が蔵書の出納に携わった藩校が 1 校であった。このように見てくると、藩校の文庫を担当するポストは他の教育職或は事務職との兼職が一般的であったといえるだろう。

発表②

松崎 博子 (筑波大学図書館情報メディア研究科博士後期課程)

○ 発表題名

ウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクールの歴史 1963-70 年

○ 発表要旨

シェラは、アメリカの図書館学教育カリキュラム研究をカーネギー財団から委託された唯一の研究者であった。当時、彼はウェスタン・リザーブ大学ライブラリー・スクール (以下、WRULS) のディーンを務めていた (1952-70)。この LS の歴史については『WRULS 75 周年記念 1904-79』(クレマー、1979) という先行研究がある。筆者は今回、クレマーも参照している資料ではあるが、当該 LS のアニュアル・レポートとブルティン入手し読んだ。そこに先行研究では言及されていないが注目に値する事実を見つけた。

筆者はシェラ学部長時代を 4 つに分けそれぞれを最盛期、転換期、安定期、過渡期と名づけた。シェラが実現した画期的な取り組み (下部組織ドキュメンテーション・センター設立、博士課程設置など) はすべて彼が着任して初めの 6 年の間の出来事だったことがわかった (最盛期)。1950 年代の終わりになると、修士論文の必修の是非をめぐるシェラとファカルティが対立し、シェラが敗れるということがあった。同じ頃に地元クリーブランド公共図書館の現・

元ライブラリアンの教員に占める割合が減少したこともわかった（転換期）。1960年代に教員の数は増加の一途をたどり、その多くはドキュメンテーションを専門領域としていた。児童サービスの教員は常時2名が配置されていた。シエラは他学部との学科目統合を模索し、法学部などに働きかけたがこれはうまく運ばなかった（安定期）。

発表③

中村 百合子（同志社大学）

○ 発表題名

19世紀末から20世紀初頭の米国における学校図書館に関する議論の進展

○ 発表要旨

米国では、19世紀末に、教育また図書館を主に扱う雑誌に、学校教育と図書館を関連づけて言及した記事が見られるようになる。今回の発表では、米国の学校図書館史の初期の思想と実践を探るべく、19世紀末から20世紀初頭、具体的には1920年までに、学校と図書館についてどのような議論があったかを、6つの教育と図書館を主に扱う雑誌の記事を整理して概観した。その作業において、1880年代後半には、学校教育における図書館の重要性が、いくらか漠然としてはいたものの、主張されはじめていたことが確認された。1910年代になると、師範学校とハイスクールの図書館の充実が課題として認識されるようになった。同時期、そうした図書館に勤務するライブラリアンによる論文発表が増えた。そして、1910年代の半ばに、話題は、学校と図書館の協力から、学校図書館へと移行していた。

発表④

若松 昭子（聖学院大学）

○ 発表題名

コレクション形成と主題表現の可能性ーピアス・バトラーの実践を中心にー

○ 発表要旨

ピアス・バトラーが、ニューベリー図書館時代に構築したインクナブラ・コレクションを対象として、そこに表現された印刷革命の具体的諸相を検証した。彼は、様々な都市の異なる印刷者が刊行したインクナブラを収集し、印刷術伝播の歴史地理的過程を描出すると共に、書物形態の多様性を代表する作品群によって、近代的書物形態への変容プロセスをも明示した。しかし、重要なことは、彼がそれら書物群を通し印刷革命の社会的影響を具視的に表出したことである。すなわち、彼はメディアの転換点を概念的ではなく、書物という具体物の意味ある集合体によって表出した。これは、20世紀後半に席卷したメディア論に数十年先駆けるものであり、当時としては新しい、コレクションを通した主題表現の実践例といえよう。

【図書館文化史研究 文献紹介】

山河遙か 上州・先人の軌跡 第9部 佐野友三郎

(『上毛新聞』2009年3月16日～4月17日)

- 1 秋田で近代図書館の礎 107年前、初の巡回文庫 (3月16日)
 - 2 子供の読書推進に手腕 (3月17日)
 - 3 スト、県中学が閉校 (3月19日)
 - 4 湯浅半月が欧米流実践 (3月21日)
 - 5 山口の先進例、前橋に (3月23日)
 - 6 思い示す小冊子のメモ (3月27日)
 - 7 米視察の成果出版も… (3月28日)
 - 8 文書館の役割 先駆け (3月29日)
- 番外編 評価示す「記念室」構想 (4月17日)

現代の視点からあらためて佐野友三郎の先駆的な仕事を問い直した記事です (富田充慶、千明良孝両記者が担当)。秋田、千葉、東京、京都、山口を取材、巡回文庫、児童サービス、郷土資料の収集など、佐野の図書館運営を検証します。残された蔵書の書き込みにも光を当て、佐野の活動を支えた図書館理念を探ります。同時代に活躍した湯浅吉郎 (半月)、樋口千代松といった上州生まれの図書館人もクローズアップされています。

本会会員である小川徹氏、宇治郷毅氏らが取材に協力されました。

奥泉和久 (横浜女子短期大学図書館)

研究例会発表募集のお知らせ

本研究会では、毎年度3回 (6月頃、12月頃、3月頃) に研究例会を実施しています。研究例会での発表を希望される方は、次の各項を明記して、別記の事務局までお申し込みください。

- 氏名 (所属)
- 連絡先 (住所、電話、メールアドレス等)
- 発表題目
- 発表要旨 (200字程度)
- 発表時間 (通常質疑応答を含め1件1時間程度)
- 発表希望場所 (例：関東、関西)

運営委員会通信

■ ■ 次回運営委員会について ■ ■

次回運営委員会を、下記のように開催します。本研究会の運営に興味・関心のある方は、是非ともご参加ください。

当日ご都合の悪い方は、別記事務局まで郵便、ファックス、または電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

記

- 日 時 11月28日(土) 15時50分～17時10分
- 場 所 明治大学 リバティタワー6階 1062教室
- 内 容
 1. 2009年度第3回研究例会について
 2. 2009年度研究集会について
 3. 創立25周年記念事業剰余金の使途について
 4. 2010年度研究集会・総会について
 5. 『図書館文化史研究』第27号について

ほか

■ ■ 前回運営委員会の報告 ■ ■

実施日：2009年9月14日
場所：皇學館大学

以下のような事項について、協議しました。

1. 2009年度研究集会・総会について
2. 2009年度第1回研究例会について
3. 2009年度第2回研究例会について
4. 2009年度第3回研究例会について
5. 25周年記念事業剰余金の使途について
6. 2010年度研究集会について
7. 転載許可の件
8. 『図書館文化史研究』第26号について
9. 『ニューズレター』第109号について
10. 『ニューズレター』第110号について
11. 会員動向

ほか

事務局だより

■■ 会費納入のお願い ■■

2009年度会費をまだ納入されていない方には、封筒に「会費振替用紙在中」の朱印を捺し、振替用紙と会費納入のお願いの文書を同封しました。至急ご送金ください。

なお、日本郵政公社の窓口扱いの口座送金手数料が値上げされました。つきましては、会費の送金は極力ATMをご利用くださるようお願い申し上げます。

■■ 住所変更等のご連絡をお願いします ■■

研究会からの刊行物の送り先などについて変更が生じた場合、あるいは封筒貼付の宛名ラベルの記載が不正確な場合、早めに事務局までご連絡ください。

■■ 会員動向 ■■

新入会

古屋野^{こやのそざい}素材（明治大学）

研究分野： 高等教育史、情報社会教育論

邊見^{へんみ きよし}清志（都留文科大学非常勤講師）

岡^{おか}寫^{じま}偉^い久^く子^こ（天理大学附属天理図書館）

研究分野： 日本中古文学・書誌学

中野^{なかのゆみこ}友美子（皇學館大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程）

研究分野： 江戸時代から明治初期の国学者の蔵書構成

訃報

坂本龍三氏が6月13日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。